熊本大学学術リポジトリ

秋韻 ： 文苑

著者	夕陽子
雑誌名	龍南會雑誌
巻	１０２
ページ	２２-２９
発行年	1903-11-25
URL	http://hdl.handle.net/2298/5622

文苑

秋韻

夕陽子

『一』

山鳩の夢も木の間に寒からむ、ゆふべは谷の風冷ゑて、山里の秋はいたくも老いぬ。あさゆふにこわねやさしくおとなひなれし小鳥のむれも野べの方にやさまよひゆきし、悽寥たる住ひの窓の日々にさびれゆく此頃や。村雨の音に亂るゝ庭の落葉の今さらにわが身の上を語るがごと、夜毎の窓にかよひては、ろれよ思ひ出さるゝ昔の春ののどけきなづかしき。おゝわが友よ、かつて暮春の夕まぐれ寂しき斷橋のほとりに立ちて、ゆくへも知れず流れゆく水と落花を惜みし時よ、われはろゞろに人の世の短かき命運をまぼろしの中に見止めしが、爾來星光しづかに消ゑて、今秋宵の窓に眼をひらけば、水よ落花よいづくに行きし、吾は天地に一人の孤客、なづかしの君とは西ひかしまた相見ること叶はずなりぬ。げにゆく水の流れは日々に絶ゑずしてしかももとの水にあらずと云ひけん古人の言葉のいみじくも聞ゆるものかな。みどりの野邊に若草ふみし昔は云はずもあれ、都大路の月の夜を、學びの隙に彷徨ひし二人が若き面影の今さらに繰り返さるゝを、あゝ如何に如何につれなのさだめや。落はなるゝあら波もやがてはふたゝび寄せこむを、如何なればタイムの波の一たび

去つてかへらざる。今し風の音のみ細く寂しきこゝの山家にこもり居の身となりて、暮雲の西に沈みゆく鳥の影なぞ眺めては、またさらに心細さのかず〳〵つのりてゆくよ。もろ共にむつみし友、なれにし學びやの窓、にぎはひし都の樣、夜更げて獨り思を遠く雲烟のかなたに馳すれば消ねなむ思ひなからずやは。おゝわが友よ、吾は今この廣漠たる世界の中に孤影子然として立てるなり。

『二』

よべは下手の村の少女がやせしかひなに打ち鳴らす小夜砧の音を聞きつゝ、折ふし月かげのあかきにうかれて谷の流れにさまよひぬ。をち方の山は一面に淡き月光をあびて、ほんのりと夜の世界に姿をきさみ、そこらの森の杉木立傘を立てたるがごと、月の光をあびたる、いづれか寂しき眺めならざる。苔むせる巖のあたり水は千古の音に出でて、永劫の秘密をさゝやくかのやう、流れ流れて、はてはほの暗き林の奥に消ゆてゆく。三笠の山の月を偲ひて三千里外故園の秋をなげきし古人の心はさることなれ、今青春の夢破れて都を遠く距てゝ故國の山河に接すれば、ありし世の面影夢の如くに浮び來るよ。雨に風にすこやかなれと祈り給ひしたらちの親は、今は空蟬の名殘もなくて遠き黄泉の人となりませり。あはれ世はいたくもうつりけるかな。かつて少年の樂しみに夏のひねもすをてゝの川邊に釣り暮しゝことのくりごと今思ふだにいたはしや。それよろの折、青葉のしげみをこよなき蔭と喜びて、ろが根もとをてゝろよき足場となしゝ樫の老樹、美はしかりし枝葉の名殘りもなうこぞの嵐に仆れて枯れぬ。おゝ友よ、かくて年々に寂れゆく我が里の光景遠く察しね。

顧ふ春風ゆるき朝、もろ共に希望に燃ゆる暖かき胸を二人輕衣の中につゝみて、遠く都に立ち出で

し折よ、我が意氣は一時雲をも捕へんばかりなりき。さるにあゝ青春の夢はとみに破れぬ。はぐゝみ給ひし父、いつくしみ給ひし母、思はさりき、時を同じうして世を去に給はんとは。君よゆるせ、わがむねの血しほはとはに涸れたり、今裝村のゆふべ〳〵を、月にたへがたき思ひをよする一人の若き愁ひの子、君よゆるせ、我はこの茫漠たる世界の中にすべてのものを失ひけるなり。

『三』

かつ散りて流れに浮ふもみぢ葉のこのごろいとゞまれかになりぬ。さを鹿の後ろの森に近く來鳴きし夜半なり、寢ざめの床に眼のさゑてねられぬまゝに窓押し開けば、折ふしおぼろ月夜は時雨になりて柿の落葉のしどけなく亂れて散りぬ。嗚呼關山の夕べの雲を眺めんにはわが目あまりに曇れり、今は何物をも見じと床にかへればもろ〳〵の想ひつのり來りて、たましひは空ゆく雲のはやてに乘りてかけり狂ふよ。止みなんかな人の世の行くへ、友よあゝわれ云ふにも堪へんや、泰山それ頽れん乎、哲人ろれ萎まんか、こは彼の大聖が臨終の言なりとか、如何にろの言の悲慘なるよ。あゝ倫理よ道德よ、尙ろが光りうすくして世の瞑闇を照らすに由なし。かくて人の子差別の世界に喜怒哀樂を演じつゝある間に、運命の神は無限の力を以てあらゆるものを踏みつぶしてあまゝざるなり、ろれよ靜かに觀念の眼を閉づれば、善や、惡や、戀や、譽れや、そはとゞ〳〵大海の小漣波、底にはつめたき永却のうしほの流るゝよ。あゝ人生の事錯雜多端云ふに忍びざるものあるも、飜つてろが眞相を觀察すれば、悲しからずや、一切のものすべて空なり。昔はアレサンダ―馬をガンヂス河畔に駐め、遠く渺茫たる印度の天地を眺めやりつゝ潸然として落涙して曰く、もはやわが爲すべき

何物をも殘さざるなりと、あゝかくして彼は逝きぬ。彼は多くを爲したりき、されど彼は何物をも殘さゞりしにあらずや。思ひ來れば人生の事何れか空にかへらざる。嗚呼天地は悠久なり、而も人間何なればかくあはたゞしき。自然の力の强き中に人のみ何ぞかく弱きや。止みなん哉おゝわが友よ、われは今われを捨てん、小さき弱き我れを捨てゝ、とこしへに天地の間に分け入らむ。

『四』

君よ、かくても日かげは早く過ぐるよ。ふりみふらずみ晴れもなき時雨にこゝ二日はこもりて暮しぬ。朝來の雨は今やうゝ足をおさめつ、空ゆく雲のちぎれ〳〵てやがては入日の西に嚥脂の色を染めなしぬ。寂しの夕ぐれや、今日もはや名殘となりぬ。谷間の風のことさらに冷たきはやがて嚴霜の色も見るんか。今しも我一人戸に立てば、夕陽遠く彼方の峯に沈みて空ゆく鳥の三つ五つかすかに鳴きては雲のあなたに消ゆてゆく。なつかしきかな彼方の空、夕陽遠く虞淵の西に沈み行くところ、そこに靜けき世界はあらじか、あらゆる濁世の戰ひに疲れし吾れには、彼の紅蓮の雲の奥、永劫の平和と慰籍とに滿てる世界こそ願はしけれ。友よ、吾を以て妄りに世を嘆く者と笑ふ勿れ、博學天才の哲人ショーペンハウエルにして尙且人生は涙の谷なりてふ斷案を下しゝにあらずや。彼の一時の光榮に誇りて世に時めく似而非樂天家や、彼等は遂に人世の眞義を解せざるなり。憐むべし彼等は黃金の光を以て世に存する最美はしき光と思へり。あゝ光明と暗黑とは二つながら虛榮の輩の見るを得ざるもの、暗黑の何たるを知らざる者は、光明の何たるを知らざる者なり、見よ美はしき朝日の光りはやがて幽暗の夜の終りを示すにあらずや。

『五』

うつばりを走る鼠もこのごろとみに姿をかしぬ、けだし日ごと〳〵に寂れゆく我が住ひを見棄てしならんか。ことにつけ物につけうれはしの思ひ止めんに由なければ、昨日は午後より半里ばかり距てし山寺をおとなひぬ、そこには我が祖先の墳塋あり。悽寥たる樒の垣根を越ゆれば。落葉堆かき墓地の光景見るからに物すごや、苔むせる斷碑のあたり、枯れし草間に鳴くは蟋蟀か、おゝやがてみぢかき秋の日を露に消ゆくわが身とは知らずや、折ふしの風に一しほあはれに咽びてなくよ。落葉せし木立の末に立てる寺院の塔の獨り秋山の寂寞を瞰下せる、けだかくさはれさびしの姿や。我れは携へ來りし二もとの菊を父母の墓前に手向けてしばし追懷の涙に咽びしが、さてあるべきにあらねば足を運びて僧房を訪ひぬ。やせさらばひし老尼の一人世にろむけるが心やさしく吾を迎へぬ。友よ、奇しき吾等の會合を思ひね、落ちかゝらんとする夕日の、かすかに弱き光線を投げて、さびしげに寺院の庭を照せる時、吾等は世の秋のさびしさ人生の命運のつれなきを泣きぬ。さなり、此の半日、吾はあだかも死に瀕せる病者が餓ゑし旅人を憐れむがごと、われとわが身を忘れてありき。

『六』

『人坐貴賤無終始。倏忽須臾難久恃。誰家能駐西山日。誰家能堰東流水』。と歌ひし廬照隣が情韻の、如何にわが胸底深くひゞくよ。あゝ誰かよく西山の日を駐めんや、流るゝ水を塞がんや。かくして人は來り、人は逝きぬ。貴き賤しき若き老いたる、ろのけぢめは極めて少なきものなることをわれ

今にしてきとも偖如。かつて青春の血のゆらぎに紅顔の美を誇りし人なり、わが身世にふる眺めせし間に花の色はうつろひはてぬ。友よ吾をしてしばし此老尼が昔を語らしめよ。

山吹の水に緋鯉のをどる春のくれ、十九の髪のうるはしう夕ぎよめ終りし少女は心地ずゝしく庭の池邊に下り立ちぬ。折ふし垣根がくれを流れゆく小川にかすかに人の聲するよと垣間をすかしてうち見やれば、めづらしやまだ年若き男の如何なるみやびぞ、たゝ一人ゆるき流れに舟うけて、落花を浴びて下り行くなり。をとめの胸は急に波うちぬ。されど彼方は知るや知らずや、詩吟の聲のひくゝかすかに、舟は自然に流れ〳〵てはては淡靄の彼方に消ゆぬ。少女はゆ堪へぬ思ひに悶ゆしが、つれなや人の姿は折ふしのまばろしと少女の胸にうつるのみ、うつゝのろれは遠き遠き世界にゆきて見ゑさりき。

あさに夕にせめて一度と思ひ惱める少女の里に春はむなしく暮れたり。夏もはや名殘すくなの暮つ方、野に夕立すぎて向ひの森に虹のかげ美しき時なりき、少女は川邊づたひに此方をさして辿り來る相合傘の二人を見たり。目をこらせばろの一人はまがふかたなき意中の人なりき。少女は嬉しさなつかしさに堪へで馳せも出でんとせしが、うらめしやろの男は春花燃ゆなんばかりの一人の少女とむつめるなり。渠は悄然として戸に立てるまゝうらめしげに二人の方を眺めやりぬ。やゝ近づけばうらめしきその少女は、あゝねたましきその少女はわが最愛の妹なりき。渠は泣きに泣きて妹のさちを嫉みぬ。げに恐ろしきは戀の魔神なるかな、渠が妹に對する愛情は一變して嫉妬怨恨の心となりぬ。渠は妹の愛をさかんがためそが秘密を父母に明しぬ、憐れむべし、美はしの戀は見る間に裂

かれたり。父は怒りて戀を責めぬ。責めて幾度か思ひをさへぎりぬ。されど一たび戀のうま酒に醉ひしもの如何でかさむる時あらん、あはれなる彼女はその後間もなくいたつきの床に臥してつれなき此世を辞しゆきぬ。戀人を失へる男は悲哀の極遂にこゝの里をのがれて雲烟遠くさすらひの子となりぬ。さるにても憐れむべきはかれ少女なり、自らの愛を得んが爲にいとしの妹を殺し、はては戀人の影さへ失ひぬ。あはれ陽春の空老いて野に秋風渡る、麗はしかりし天地の色はとことはにあせゆきて、彼女は一人秋の野末に鳴き弱りたる蟋蟀（こほろぎ）の悲しきさだめを見るに至りぬ。

友よ吾はもはやこれより多くを續くる能はず。あゝ悲しきことの多き世なるよ。ろの少女のなれの果てこそやがて彼の衰へし老尼なれ。あらゆる人生の苦悶と戰ひし彼女は遂に堪へず世を逃れて幽寂なる天地を已が家と定めぬ。されどあゝ、彼女は果して戰ひより救はれて、安けさ平和を得しや否や。

『七』

ぬばたまの闇路を辿る人の子には恐ろしの鬼も菩薩とあらはれ美しの花も妖怪と現ずるよ。明なきものは哀れならずや。かくて朝夕利慾の野心にかられては、同類互に火花を散らして闇の巷に戰ふなり、されど彼等は何がために戰ふかを知らず、吾れ勝てりと誇れる者やがて自らの劍を以て自らを殺すものなり。人生のことあゝわれ云ふに忍びんや。強きと弱きと富めると貧しきと賢なると愚なると、彼等の目には寂しき差別あらんも、而も一切を超絶せる神の心眼より見るときは均しくこれあはれなるものにあらずや、嗚呼區々たるものを何かせん。名よ富よ戀よ譽れよ、ろは彼の大海

の泡沫の如く、河畔の夕虹の如し。而も人間何なればかく消ゆやすき幻影を慕ひて自ら戰はざるべからざるか。あゝ我はもはや多くを云はざらむ、吾は戰ふことが人生の運命なることを今にして悟り得ぬ。基督も戰ひぬ。而して彼は十字築上に死したりき。釋迦も戰ひぬ、而して彼は鶴の林に死したりき。あゝ戰ひなるかな、戰ひなるかな。友よ、われはもはやこれより多くを云ふこと能はざる也。たゞ世の激浪にたへずして一人寂しき故國の天地に人となりても運命は至るところに襲ひ來るを如何にせん。さらばわれ戰はん、かくて人の世の戰ひつきて永刼の眠りにつかん時、墳墓の上には春風の吹くうむか、あゝわれまた何をか云はんや。

（完）

海邊の瞑想

芒村

雲は漂々として岫を出で、風は蕭々として衣を吹く、おほひとゞせ、秋風ふき起る頃海濱にありたる一週間の記事なり。吾句ひなき筆吾たくみなき想の、如何にして其間に享けたるおぐさめを、其間にみたる自然のなつかしき色をうつし得んや、只筆とつて人にまみゑんまでのすさびゝ。

〔一〕

露零珊々として松が根の小草にかゝり、殘月ほのかに雲の彼方にかくれんとす。あゝなつかしきは